



# 一貫コース通信

## ニューノーマル…考

コロナ禍は短い間に沢山のカタカナ語を創り出した。これ等の言葉達は、いずれ各社の新『国語辞典』にコロナ時代の新語として付加されるのだろう。だいぶ前に三浦しをん著『舟を編む』を読んで解ったが、辞書編纂者とは人々の密林に分け入り、新語を射止める言葉のハンターであるのだ。戻るが、コロナ危機でこれまでの社会常識では基本的な安全の担保が難しくなった状況が、カタカナ語を生み出したのだろうか。



ご存知の通り言葉は概念でもある。従って、そこにはニューノーマル≡諸々の状況を包括する実態が伴っている筈である。実のところ、私に取ってのニューノーマルは、毎朝の検温とアライグマにも似た手洗いと言ったところだが、ウガイやヒトを前にしてのマスク着用もこれに当たるかも知れない。今では1年以上もリピートしたので、自然にやれる様になっている。つまり習慣化したのだ。『舟を…』を読んだ事で解ったが、時代と共に消え去る言葉がある反面、時を越える言葉の存在を意識する様になった。その中で習慣化されたニューノーマルにあたるものが在ればこそ、言葉としてのニューノーマルも使い続けられると考える。

話題は替わるが、今から33年前の事、趣味(登山)が高じて、7000m級の登山の機会が与えられた。この高度の最大の難題は何を差し置いても酸素分圧(濃度)だ。解り易く言うと、標高5500mで地上の半分、8000mで三分の一になる。この、低酸素症を克服しないと死に陥る事もシバシバなのだ。低酸素症は別名“高山病”で、日本に於いても3000m級の登山でも現れる。頭痛、吐き気、倦怠感等(二日酔いと同じ)で、目眩も起こる。また、5000m以上では肺に水が溜まる肺水腫を発症する。回避の為に、時間を掛けた高度順化(訓練)が必要だが、訓練の為“筑波大学”の浅野先生の協力を仰いだ。毎月1回、筑波大に赴き低酸素チャンバー室に入り、約3時間のトレーニング(自転車漕ぎ)を行った。辛いのは、毎回前・後2回のドクターに因る採血で、思えば“筑波大院生”の博士論文のモルモットを演じたのである。また、トレーニング開始(2月)から登山が終わる約半年間(8月末)、一日に3回(朝・昼・晩)の検温を命じられた。奇遇にも昨春、生徒諸君に検温の協力をお願いしたが、私には、この事(検温の習慣化)が当時の思い出と重なったのである。(因みに、“肺水腫”は体温で解るのです。)

酸素の恵みを実感したのは、この経験が初めてである。低酸素は脳細胞を著しく死滅させる。登山を終えて一月の間、頭が**ぼん**とし続け…ついに記憶力・思考力が元に戻らなかった。その時、筑波大のチャンバー室で、仲間の提案で3桁の掛け算の正答率を測ったが、低酸素が及ぼす脳の機能低下に焦った事を思い出した。後悔先に立たず!!、もう手遅れだった。スーパー・サイヤ人(変身)ならぬ、自分自身が“ニューノーマル”になったのだ。

その自分と過ごす事33年。それ以前・以後が交差しようとしているが、ニューノーマルが悪い訳ではない。時代違わず、スーパーマンや悟空も変身後こそ一層魅力を増すのだから。